

(続) 日蓮大聖人のご生誕日に思う - 近刊「法華経入門」の不正 2026年2月26日  
池田先生が「法華経の智慧」でご指導された日蓮仏法の真義を無視する不知恩の書、  
文底が言葉だけの「法華経入門」は「法華経の智慧」研鑽の入り口とは言えない！

創価高・大学4期 図斉 修  
(以下、赤青茶字、下線は図斉記す)

私は、2月16日、日蓮大聖人のご生誕日に、拙文—日蓮大聖人のご生誕日に思う - 近刊「法華経入門」の不正—を記し、皆様に送付ご案内しました。

拙文 <https://share.google/azWYgI1Ax9clXHqMc>

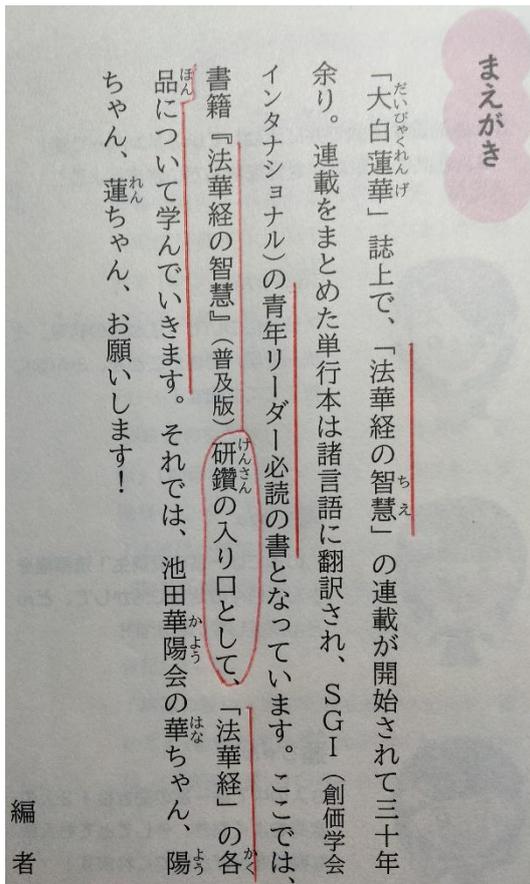


その後、1月26日発刊「対話で学ぶ 法華経入門 創価学会女性部編」(以下「入門」と略)を更に精読した結果、この本は池田先生が「法華経の智慧」普及版(以下「原本」と略)で垂教された日蓮仏法の真義を記さず、先生のご指導に完全に違背している！故に私はその題名を「日蓮仏法の設計図である法華経について」と記すべきであると確信しました。今の題名では、まるで、法華経の文上の解釈が主役の様だからです。



池田先生は「原本」上437頁、法師品で—法華経は、大聖人のために説かれたのである、という証明になっている。そして、仏を仏にした「根源の一法」である「南無妙法蓮華経」こそが法華経の真髄であり、末法のすべての衆生を救う大法であることを教えようとされたのです—と。

また、創価学会の原点と拝する旧版の創価学会版法華経(1961年発刊)の序文で、池田先生は—法華経二十八品は、三大秘法の仏法の序分として流通分として用いるのである。すなわち御本仏・日蓮大聖人様御出現の予言書として、また依義判文の立場で学問的に使用することは許されるのである—と。さらに、小説「新・人間革命」第6巻若鷲の章で—日蓮大聖人及び三大秘法の御本尊を建造物とすれば、法華経二十八品は設計図にたとえることもできる。家を建てるには設計図が必要ですが、最後に大事になるのは設計図ではなく実際の家です—と法華経の使命、役割の限界をご指導なのです。しかし「入門」は、上記、池田先生のご指導を弁えず、釈迦本仏論の法華経文上解釈なのです。私は、上記先生のご指導を拝受、前回記せなかった「入門」の不正について、前拙文での「原本」からの引用以外をご紹介して、今回その続きを記します。(一部、引用の重複ありますが、ご寛容下さい) 1/37



まず、今回の拙文の結論を述べます。

—今回も前の拙文に揭示した「入門」のまえがきについて記します。ここには—「法華経の智慧」（普及版）研鑽の入り口として、「法華経」の各品について学んでいきます—と記述です。

（私見）これは、「入門」は「**原本**」のために法華経を学び、その学んだ内容を「**原本**」の研鑽のために役立てます、と捉えられます。

しかし「入門」の実態は「**原本**」の記述を引用しながらも、最終的には**法華経の文上解釈に収束し、釈迦本仏論**になっている。これは「**法華経の智慧**」（普及版）**研鑽の入り口**、とは言えない！—これが本**拙文の結論**です。

次頁以降で、上記の結論を具体的に論証しますが、以下、「入門」での誤りの主要な点を順不同、趣意ですが掲げます。

1. 215頁では—**池田先生**、「**法華経の智慧**」、「**文底**」を掲げているが、「入門」の全編において、「**文底**」の本義は、全く、記されていない！
2. 196頁では—「**勤行**」、163頁では—「**御本尊**」、90頁では—「**虚空会の儀式**」「**御本尊の相貌**」の名前だけは記すが、これらの真義は**池田先生**の「**法華経の智慧**」の最重要論考、論述である。故に、これらを記す以上は、それらの本義を明確に記す責任が「入門」にはある。しかし、実態はそれが全くない！
3. 126頁では—「**仏の永遠の生命**」、128頁では—「**釈尊の生命は永遠不滅**」との記述だけで「**原本**」の本義、**日蓮大聖人=久遠元初の自受用身**、**人法一箇**の論述が全くない！これでは「**法華経の智慧**」を引用したとは言えない！中途半端な引用、その上に文上解釈もごちゃ混ぜである！以上が「法華経入門」の不整合の極み、誤りなのです。これでは「**法華経の智慧**」の研鑽にならない！ 以下、この趣旨で本拙文の論述を進めます。 2/37

池田先生が万代の世界広宣流布のために残された「**原本**」上 55.56 頁には一法華經の真髓を説かれたのが大聖人です。法華經を学ぶことは、大聖人の仏法を学ぶことに通ずる。大聖人の仏法を学ばば、法華經も分かっていく。表裏一体です。ゆえに法華經を語ることは、ただ釈迦仏法のみを探究することではない。大聖人の仏法の、はるかな未来を見つめての壮大な挑戦なのですと。

(私見) 上記に反し、「入門」は終始一貫して、法華經文上の釈迦仏法の解説だけです。ゆえに、私は「入門」が「原本」を引用する以上、池田先生が教示された日蓮本仏論の真義、就中、**日蓮大聖人は久遠元初の自受用身**であられ、大聖人が顕された曼荼羅本尊はまさしく大聖人様そのもの、即ち、**人法一箇の御本尊**であることを無視してはならない。しかし、「入門」がその真義を記さないことは日蓮大聖人と池田先生への背信であり、不知恩の極み！と断言します。「原本」を引用しておきながら「法華經入門」と称して文上の法華經に導くことは主従逆転なのです。そして、それはまさに主の隠蔽、否定です。大聖人が残された文底仏法を破壊する大謗法の書と断じられます。なぜなら、池田先生は「原本」において、日蓮仏法の本義をご教示される目的で法華經を用いたのであり、法華經の文上解釈をされたわけではないからです。ゆえに、「入門」は主を倒さんとする暴挙である！

池田先生は終始一貫、法華經文上の文字を最大限尊重された上で、「原本」で法華經の文底に秘沈された日蓮大聖人の無始無終の南無妙法蓮華經、そして、大聖人が顕された曼荼羅御本尊について、学会内外へ論証されたのです。それに対し、「入門」はその池田先生の「原本」の文底講義を無視、文上の都合のよいところを抜き出し、法華經の文上、釈迦本仏論へ引き返そうとする狡猾な作文なのです。私はその実態をこの拙文で再度、以下、**日蓮仏法の真髓—1. 文底解釈の意義、2. 久遠元初の自受用身 3. 人法一箇**につき論証します。

上記3点全てが「原本」下 231～234 頁、如来神力品に以下記述です。—**池田 御本尊の相貌は、中央の「南無妙法蓮華經日蓮」の脇土として、釈迦如来と多宝如来が示されている。そのまた脇土として地涌の四菩薩が示され、重々の脇土になっている。事顕本は、この脇土の「釈迦如来」の一身のことです。五百塵点劫という、はるかな昔に成仏しましたという「本果」を示した。また、その本果の功德として、長遠の寿命と、あらゆる衆生を救う無限の智慧と慈悲を示した。その説法を聞いて、では、その偉大な「本果」とはいかなる「本因」から生まれたのか、本果の功德が帰する「根源」は何か——それがわかったのが、理顕本を悟ったことになる。** 遠藤 久遠の成仏の原因については、寿量品に「**我本行菩薩道（我本、菩薩の道を行じて）**」（法華經四八二ページ）とだけありますが、**その文の「文底」に、成仏の「本因」ある。これが「文底」の意味です。** 3/37

須田 天台宗でも文上・**文底**という言葉こそありませんが、これに通ずる考え方はすでにはっきりあります。それが「事用顕本（事顕本）」「理体顕本（理顕本）」です。また「教相顕本」「観心顕本」という立て分けをする門流もあります。示そうとしている方向性は同じです。齊藤 経文の表面に現れていない“**真実の顕本**”があるということですね。

池田 それは何か。寿量品での説法は、**釈尊個人**についての「**顕本**」です。「**人間・釈尊**」が自分の「**生命の本質**」を示したといってもよい。これは、あくまで「**個人としての**」**顕本**です。しかし「**文底**」の**顕本**は、これとまったく違う。けたはずれに違う。それは**全宇宙的な**顕本です。凡夫から仏まで、十界の一切衆生の**全体の**顕本なのです。「**文上**」では、**五百塵点劫**の昔から説法教化し続けている「**永遠性の仏**」が示された。須田 「**久遠実成の釈尊**」です。

池田 しかし**永遠性**といっても**完全に永遠**ではない。どこまでも「**有始（始めがある）**」の仏です。だから**無始無終**の宇宙即妙法と**一体**とは言えない。”**すき間**”がある。ゆえに、文上の仏は「**法勝人劣（法が勝れ、人が劣る）**」です。寿量品の真意は、この「**永遠性の仏**」を通して完全なる「**永遠の仏（久遠元初の自受用身）**」を示唆するところにあつたのです。この「**永遠の仏**」は**無始無終の妙法と一体**です。宇宙の**大生命**そのものであり、「**人法一箇**」です。

遠藤 ということは、宇宙の一切衆生がそのまま「**永遠の仏**」だということになります。

池田 生きとし生けるものが**本来、仏**なのです。これが**寿量品の叫び**です。これに目覚めよと**法華経**は訴えているのです。齊藤 整理しますと、文上の顕本は「**釈尊個人の**顕本」、**文底の**顕本は「**全法界（十界）の**顕本」——こうなります。須田 スケールも深さも、全然、違いますね！

池田 まるっきり次元が違う。本門と迹門の違いが「**水火天地の違目**」と言われている真意は**文底の**顕本を知って初めてわかるのです。遠藤「**如来とは一切衆生なり寿量品の如し**」と大聖人が言われた本義も**文底**の次元から言われているわけですね。

### 「**文底**」が説かれて**仏法は完結**

齊藤 前項で、仏教の歴史を「**仏因の探求**」という観点から語っていただきましたが、その探求の究極が「**寿量品の文底**」にあるという結論になります。ここまで至らないと、「**生きとし生けるものを仏にしたい**」という釈尊の願いも完結しません。

池田 **寿量文底**の「**仏因**」とは、言うまでもなく**無始無終の妙法**であり、**南無妙法蓮華経**です。これは「**仏因**」であると同時に「**仏果**」です。「**因果俱時・不思議の一法**」です。これを**寿量品**の説法を聞いて**覚知**したのです。

（私見）上記**日蓮仏法の真髓—1. 文底解釈の意義 2. 久遠元初の自受用身 3. 人法一箇—**を「**入門**」は記さず、ただ「**文底**」の言葉を3回（28, 212, 215p）に記すが、「**文底**」の意義を記していない！これは酷い！ 4/37

また、池田先生は上記「原本」で「我本行菩薩道（我本、菩薩の道を行じて）」（法華經四八二ページ）とだけありますが、その文の「文底」に、成仏の「本因」がある。これが「文底」の意味です。一と、また、「原本」中 250 頁、如来寿量品には一須田 大聖人は「開目抄」で「一念三千の法門は但法華經の本門・寿量品の文の底にしづめたり」と仰せられています。では、寿量品のどの文の底なのか——古来、いろいろと論議されてきました。日寛上人は、この「我本行菩薩道」の文の底に沈められていると明快に述べられています。

**池田** そうだね。「永遠の大生命」を自覚した仏の不可思議な境地を、天台は「一念三千」として表現した。その一念三千も、寿量品を魂とします。ただ、寿量品では、釈尊の成仏後（本果）の不可思議な姿をもって永遠の生命を示した。これが「本果妙」です。しかし問題は、現実の人間がどうしたら永遠の大生命を自覚できるかです。それを説くのが大聖人の「**本因妙**」の仏法です——と明確にご指導されているのに、「入門」はこの根本義すら記さない！

（私見）この30年間、「原本」を座右の銘、否、自身の信心即生活の原点、基盤としてきた私、そして多くの学会員にとって、上記のように、「原本」を無視した不正の「入門」は断じて許せません。こんな法華經論がありますか！これでは、日蓮仏法の本義をご教示の主体である「原本」の設計図にあたる「入門」が、主従逆転の誤りをしている！と断じます。

続いてこの「続編」は「入門」の最も酷い不正を糺します。それは「入門」が一日蓮仏法の真義「**人法一箇**」を完全に無視していることです。その論拠として一池田先生の「**生死一大事血脈抄講義**」（池田大作全集第 24 巻 215 頁）には一 本抄の総結論として「信心の血脈なくんば法華經を持つとも無益なり」と厳しく仰せられているのであります。結局、信心に始まり、信心に帰結する。「信心の血脈なくんば法華經を持つとも無益なり」一法華經という法のみで

は、真実の成仏の道には入れない。法華經を身をもって読み、人法一箇の当体とあらわれてくださった日蓮大聖人以来の正統の信心—これが「信心の血脈」なのであります。この人法につながった信心でなくては、いかに法華經を持っているといっても無益なのです。この文は、信心の中にこそ御本尊の仏力、法力も顕れるという御指南でもあります。一との最重要のご指導でございます。

上記、池田先生のご指導から、「入門」は日蓮大聖人と池田先生に対して、完全に違背し、結論、大謗法の書と断言します。

「**原本**」中、278、279 頁、如来寿量品には—  
遠藤 実際、一般の仏教学でも、寿量品の釈尊はほとんど神格化して、扱われています。  
**池田** だからこそ、大聖人は御本尊を顕されたのです。これ以上の現実はない。具体はないのです。大聖人は、私たち末法の凡夫が、御本尊に妙法を唱えることで、「常住此説法の仏」と一体になれるようにしてくださったのです。人法一箇の御本尊です。”人”の側面は、久遠元初の自受用報身如来。”法”の側面は、事の一念三千です。だから、戸田先生は、久遠元初の仏のことを「一念三千様」とも言われていた。

また、「**原本**」中 283、284 頁、如来寿量品には—  
釈尊の真意は「一念三千を見よ！」  
遠藤 釈尊は、「永遠の法」即「永遠の仏」を師として仏になった。釈尊が師としたのと同じ永遠の法即仏を師とせよ、と弟子たちに説き明かしたのが**発迹顕本**である。そこには、“「人間・釈尊」に帰れ！そして釈尊を仏にした根源に直達せよ！”との力強いメッセージが込められていた。—こうしたお話に、目の覚める思いがしました。齊藤 この「**永遠の法**」とは**南無妙法蓮華経**であり、「**永遠の仏**」とは**南無妙法蓮華経如来すなわち久遠元初の自受用身**のことですね。  
**池田** そうです。南無妙法蓮華経は法であるが同時に仏身なのです。人法一箇です。ここが大事なところ。法」といっても「人（仏）」を離れた法は、「理」だけの存在です。実際には—「事」の上では—仏の智慧を離れた法というのではないのです。久遠元初の仏—無始無終の常住の仏は、宇宙生命そのものであり、一瞬の停滞もなく、常に不断に、一切衆生を救おうと活動しておられる。その仏と自分自身が、じつは一体であり、自分自身が久遠の昔から人々を救うため、広宣流布のために働いてきたのだ、今だけのことではないのだ—そう自覚するのが**寿量品の心**です。目先のことではない。永遠の宇宙的スケールで今世の人生を見つめ、甚深の使命を自覚するのは。釈尊も、「**永遠の仏**」と**一体の自分を悟った。**—と。明確です。

(私見) 上記「**原本**」を無視する「入門」は「**信心の血脈なくんば法華経を持つとも無益なり**」なのです。

さらに、「入門」の邪義は、以下「**釈尊は永遠の仏**」と記した如来寿量品の記述に象徴的です。

如来寿量品第十六 上

自らの「仏の生命」を確信する

久遠実成

「從地涌出品」では、娑婆世界の大地から無数の立派な菩薩（地涌の菩薩）が出現しました。それを見た弥勒菩薩は、釈尊が菩提樹の下で悟りを開いてから、まだ数十年しかたっていないのに、こんなに多くの菩薩たちを、仏と同じくらいに立派になるまで教化することなどできるはずがないと不思議に思い、釈尊に「いったい、いつ、どこで、これほどの無数の菩薩を教化してきたのか」と質問します。

その答えとなる「如来寿量品」では、**仏の「永遠の生命」**が説かれます。

私たちは、毎日の修行で寿量品の自我偈を読んでいるね。

摩訶訶

うん！ どういうことが書かれているのか気になる！

摩訶訶

では、勉強していいこうね。釈尊は、弥勒菩薩の質問に対し、「実に成仏してから、無量無辺の時間を経ているのである」と答えたの。

摩訶訶

あれれ？ 釈尊は、三十歳の時に菩提樹の下で仏になったんじゃないかなったっけ？ それじゃ、今までと言っていることが違うよ！

摩訶訶

そうなの。今世で初めて成仏したというのは、実は仮の姿だったのよ。今世で初めて成仏した」という考え方を「始成正覚」と言い、それに対して「本当は久遠の昔から仏だった」という考え方を「久遠実成」と言うの。

摩訶訶

釈尊は寿量品において、「始成正覚」という仮の姿（迹）を發いて、「久遠実成」という真実の姿（本）を顯した。これを「発迹顯本」（迹を發いて本を顯す）と言うんだよね。

摩訶訶

釈尊は、はるか遠い昔に成仏してから、ずっと娑婆世界で説法し、人々を教化してきたことを明かしたんだ。

摩訶訶

しかも、娑婆世界だけでなく、他の無数の国土でも衆生を導いてきたと説かれています。つまり、久遠実成の仏は、全宇宙どこにでも常住していて、衆生を救うためにあ

あらゆる場所に出現する仏なの。全宇宙どこにでも出現するなんて、SF映画みたい！ しかも、それじゃあ釈尊は永遠に存在している、ってこと？

摩訶訶

そう。釈尊の生命は永遠不滅（死）するの。その意味を示しているのが、寿量品の「良医病子の譬え」（二一九ページ別掲）ね。

父（仏）が死んだという悲しい知らせによって、毒に冒された子どもたち（衆生）が正気を取り戻し、良薬（法）を服して病が治ったというストーリーなの。釈尊は永遠の生命を持っているけど、仮に死の姿を見せて、衆生に真剣な求道心を起こさせることを譬えているのよ。

摩訶訶

修行で誦誦している「方便現涅槃（方便もて涅槃を現す）」（法華経四八九ページ）の部分だね。仏は永遠不滅だけど、衆生に法を求めさせるための方便として、あえて入滅する。そして「一心欲見仏……」（同四九〇ページ）と続くように、衆生が一心に法を求め、信受する時、仏は再び衆生の前に現れるの。

摩訶訶

そっか。確かに、いつでも師に会える、と思ってしまうえば、求道の心が薄れてしまいかもしれないね。さらに続いて「俱出靈鷲山（俱に靈鷲山に出ず）」（同四九〇ページ）とあるね。御本尊

摩訶訶

とても聡明で、どんな病でも治すことのできる名医（仏の子どもたち（衆生）が、誤って「毒薬」を飲んでしまった。かわいいわが子どもたちが苦しんでいるのを見て驚いた父は、すぐに「大良薬」（法）を作り、子どもたちに与えた。しかし、毒のために正気を失い、薬を飲もうとしない子どもたち。そこで父は大良薬を置いて他国へ旅立ち、旅先から

良医病子の譬え

使いを遣わして、「父が死んでしまった」と告げさせた。驚き、悲しみのあまり、重症だった子どもたちも正気を取り戻し、「父が調合してくれた良薬」を飲む。子どもたちが皆、薬を飲んで病を治した。と聞いて、父は国へ帰り、子どもたちと再会する。

摩訶訶

に向かつて真剣に唱題する中で、私たちは、法華経の会座に参列し、己心に**仏の永遠の生命**を顯すことができる。つまり、毎朝夕、発迹顯本していると言えるの。すこい！ 修行の意味が分かったら、明日からの修行が楽しみになってきた！

上記、「入門」126～130頁、如来寿量品では、「**釈尊の生命は永遠不滅**」と、また、最後には、「御本尊に向かって真剣に唱題する中で、私たちは、法華經の会座に参列し、己心の仏の永遠の生命を顕わすことができる。」(中略)「すごい！勤行の意味が分かった」—とだけ。御本尊の本義も記されていない！

(私見)「入門」の上記は、法華經の文上から解釈しただけだと抗弁するかもしれませんが、しかしそれは出来ません。なぜなら、「入門」は各品の最後に「**原本**」を引用するだけでなく、「入門」の本文の中で「**原本**」を多く引用しており、それ故、「入門」が文上解釈であるとは言えないからです。法華經で最も重要な如来寿量品の解説で、**勤行の意味**についての解説で、「**釈尊の生命は永遠不滅**」を記した邪義は、言語道断の大謗法である！これでは釈迦仏法ではないか！こんなことを池田先生はご教示されたことはない。学会員を騙してはならない！池田先生は**永遠の仏は日蓮大聖人**であられることを書き、厳然とご指導なのです。以下、「**原本**」232頁、如来神力品には—

**池田** 寿量品での説法は、釈尊個人についての「顕本」です。「人間・釈尊」が自分の「生命の本質」を示したといってもよい。これは、あくまで「個人としての」顕本です。しかし「文底」の顕本は、これとまったく違う。けたはずれに違う。それは全宇宙的な顕本です。凡夫から仏まで、十界の一切衆生の全体の顕本なのです。「文上」では、五百塵点劫の昔から説法教化し続けている「**永遠性の仏**」が示された。 須田 「**久遠実成の釈尊**」です。

**池田** しかし永遠性といっても、完全に永遠ではない。どこまでも「有始(始めがある)」の仏です。だから無始無終の宇宙即妙法と一体とは言えない。「**すき間**」がある。ゆえに、文上の仏は「法勝人劣(法が勝れ人が劣る)」です。寿量品の真意はこの「**永遠性の仏**」を通して完全なる「**永遠の仏(久遠元初の自受用身)**」を示唆するところにあつたのです。この「**永遠の仏は無始無終の妙法と一体です。宇宙の大生命そのものであり「人法一箇」です。** 遠藤 ということは、宇宙の一切衆生が、そのまま「永遠の仏」だということになります。

**池田** 生きとし生けるものが本来、仏なのです。これが**寿量品の叫び**です。これに目覚めよと法華經は訴えているのです。—と。

(私見) 上記、池田先生の「**原本**」でのご指導を無視して記さない「入門」は画竜点睛を欠くだけでなく、「**原本**」も混ぜこぜにし、全く整合性なき失格の書である！これを女性部の対談形式で記してはならない！ 8/37

また、上記「入門」は良医病子の譬えを記しているが、これも、**釈尊が永遠の仏**としか記していないため、「**原本**」の本意である**一文底の仏は日蓮大聖人**が全く無視されている。これでは、如来寿量品で最も大事な良医病子の譬えを読者に伝えることになっていない！以下、池田先生は、「**原本**」中 519～521 頁、如来寿量品で以下ご指導なのです。—良医と病気の子どもたち” の譬え—

**池田 「方便現涅槃」の意義は、良医病子の譬えを見れば、もっとはっきりするでしょう。** 遠藤 はい。譬えのあらましを言いますと、良医が旅に出ている間に、その子どもたちが毒薬を飲んでしまった。苦しんでいるところに、父の名医が帰ってきた。父は「大良薬」をつくって与えました。須田 **この名医は仏、子どもたちは衆生。大良薬は法華経であり、釈尊の師でもある「永遠の妙法」に当たります。末法でいえば御本尊です。**(中略) 師を求め” 一心” に— 齊藤 子どもたちが、父の死を聞いて嘆き「咸く皆恋慕を懐いて 渴仰の心を生ず (咸皆懐恋慕 而生渴仰心)」(法華経四九〇ページ)。そして「一心に仏を見たとまつらんと欲して みずから身命を惜しまず (一心欲見仏 不自惜身命)」(同ページ) となります。その「一心」に応じて、「永遠の仏」が姿を現すということです。

**池田 それは自分の「永遠の仏界」に目覚めるということです。そのカギは、仏を求める「一心」にある。日蓮大聖人は、この「一心欲見仏 不自惜身命」の文によって、「日蓮が己心の仏界」を顕し、「三大秘法」を成就したと仰せです (御書八九二ページ、趣意)。—と。**

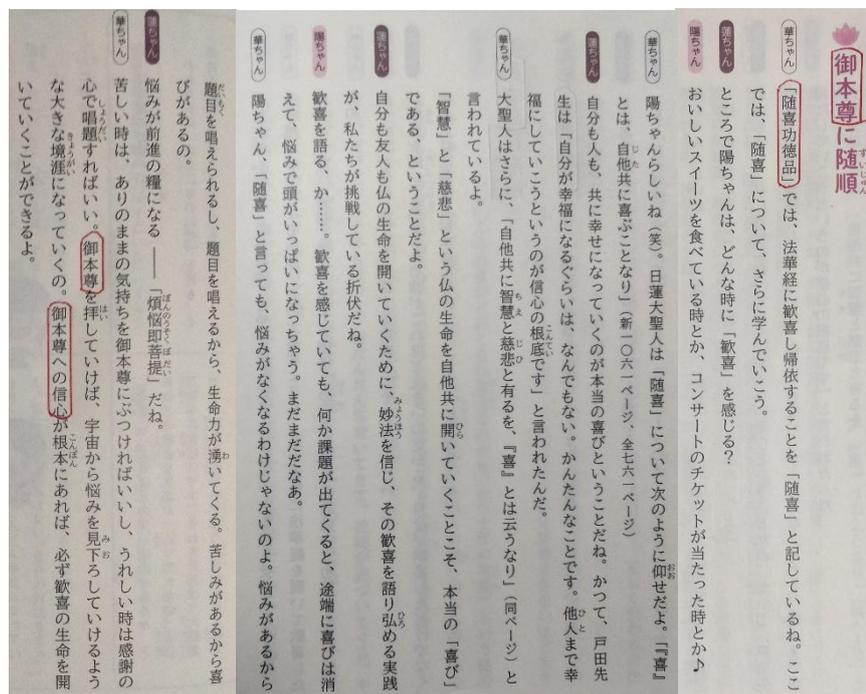
(私見) この文より、**日蓮大聖人が父であり名医であり仏**であるのです。そして、良薬は「**三大秘法**」なのです。また、「**原本**」以外ですが、池田先生は「**方便品・寿量品講義 2**」91～93 頁で—「良医病子の譬え」が示しているのは—大聖人御自身、一往・**文上の御立場**では、この地涌の菩薩のリーダーである上行菩薩の再誕として、妙法弘通に挑まれました。しかし**再往・文底で**

**は、大聖人こそ、末法万年の民衆を救う南無妙法蓮華経の「大良薬」を残された御本仏であられることは言うまでもありません。大**

**聖人こそ、一切衆生の「父」であり「良医」なのです。—と、明確に**

ご指導なのです！これらの文証により、「入門」は学会員さんを惑わす、読むに値しない邪義と断定されます。 9/37

続いて、「入門」161～163頁、随喜功德品には以下の記述です。



上記、「入門」随喜功德品にも、御本尊の本義がない。それに対し「原本」下58,59頁、随喜功德品には以下人法一箇の御本尊をご指導です。一須田 ところで「随喜」とは「随順慶喜」の意義です。信髓して歡喜することです。「隋」とは「信心」のことと言ってよいと思います。それでは随喜功德品では何に「随順」せよと言っているのか。第五十番の人の随喜の功德がこれほど大きいことから、「随順する法」も、例の大長者（八十年の布施をした大長者）の与えた法とは比較にならない大法であることを示唆しています。しかし、経文には「是の法華経を」とありますが、実体が明らかではありません。齊藤 要するに釈尊は法華経を説いて、何を信じ、何を本尊とせよと言っているのか。それが明らかでない。これは古来の仏教界の大問題ですね。池田 そこに「文底」の仏法が説かれなければならない理由があるわけです。この品の冒頭、「如来の滅後に」この経を聞いて、とあった。釈尊はもういない。それでは、衆生はどうすればいいか。釈尊を本尊にせよと法華経では言っているのか。どこにも、そうは言っていない。そうではなく、**釈尊自身も仏になした”仏因”の法を本尊にせよ**というのが「法華経の心」です。結論すれば、**人法一箇の御本尊に「随順」していく信心が「隋」であり、その功德が「随喜功德」です。大聖人は「人とは五百塵点の古仏たる釈尊、法とは寿量品の南無妙法蓮華経なり、是に随い喜ぶを随喜とは云うなり」と仰せです。これがわからないと「法華経を讀すと雖も還て法華の心を死す」(伝教大師『法華秀句』) ことになる** 一と。

また、上記「入門」の如来寿量品で、釈尊の五百塵点劫での成道について、何も記さないことも、「入門」が画竜点睛を欠くと言えるのです。さらには、上記「入門」の随喜功德品には、「**原本**」に記された五百塵点の古仏たる釈尊についても何も記されていない。これでは「**原本**」を引用したとは言えない。

\*\*\*\*\*

「**原本**」には一**五百塵点の古仏**—について、上記以上の詳述はありませんが、以下、池田先生の「**方便品・寿量品講義1**」85～87頁 一**五百塵点劫**は始成の成仏観を打破—は、まさに法華経の真髓であり、ここに引用致します。

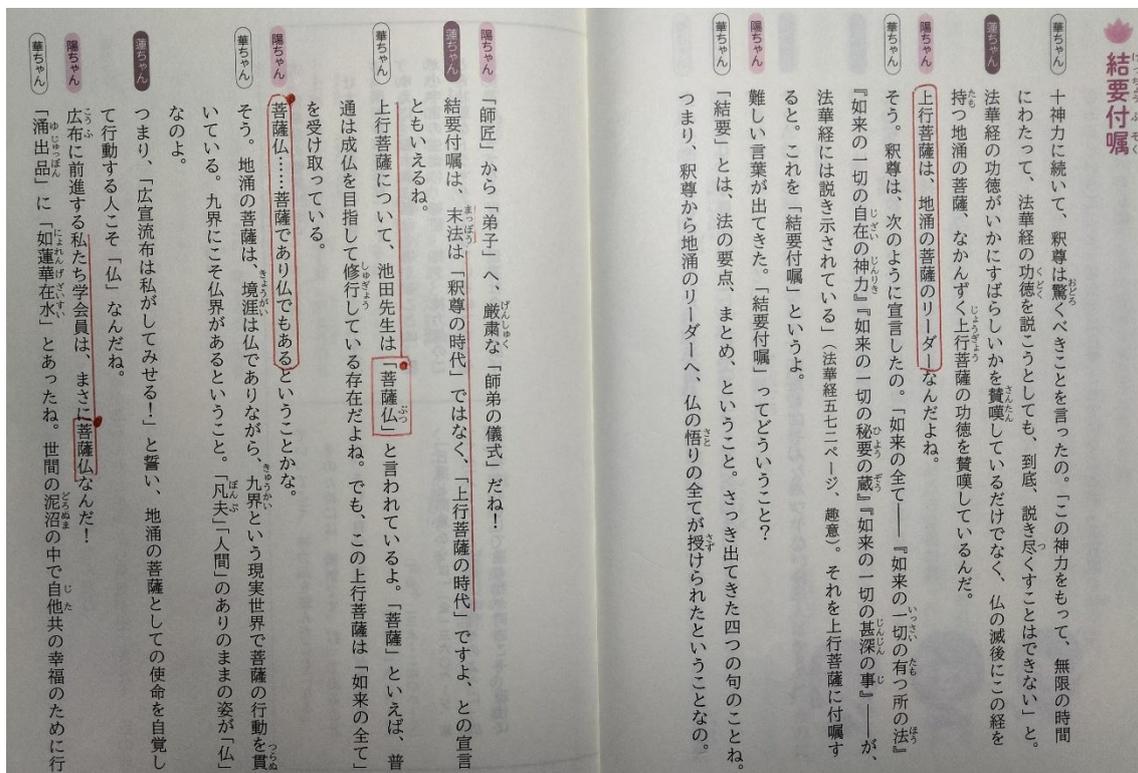
一**五百塵点劫は、無限長遠の過去ではあるが、有限な時間**のようにも見えます。なぜなら**五百塵点劫の時点で釈尊が成仏した**とされ、“始まり”があるように説かれているからです。しかし、その本質は“無始”なのです。なぜなら、五百塵点劫が説かれるのは、“ある時に始めて仏に成った”とする始成正覚の成仏観を破るためだからです。問題は成仏観です。無明を打ち破ってみれば、生命は本来、無始無終であり、その本来の生命をありのままに開くことが成仏なのです。

大聖人は「**観心本尊抄**」で、妙法を受持するわれらの「己心の釈尊」は、「**無始の古仏**」であると仰せです（御書二四七ページ）。この文底の趣旨を明らかにしたのが「**久遠元初**」です。「**久遠元初**」とは、生命の本源、大宇宙の本源という意味です。その**本源の生命こそ久遠元初自受用身如来**の生命であり、**即南無妙法蓮華経**です。「**久遠とは南無妙法蓮華経なり**」と仰せです。

戸田先生は言われた。「**日蓮大聖人の生命というもの、われわれの生命というものは、無始無終ということなのであります。これを久遠元初といひます。始めもなければ終わりもありません。大宇宙それ自体が大生命体であります。**

（中略）大宇宙ですから、始めもなければ終わりもないのであります。このままの地球だけなら、始めも終わりもあるのであります（『戸田城聖全集』5）と。私たちの生命は、創造神のような“作者”によって作られた“作品”ではない。宇宙と共に実在し、宇宙と共に無限に続きゆくものです。あえて言えば、生命自体が作者でもあり、作品でもあるのです。**文底**から言えば、寿量品を聞いたすべての衆生は、煩惱を断じてしだいに成仏に近づくという在り方を転じて、ただちに南無妙法蓮華経の大生命を信受したのです。**五百塵点劫は、この元初の大生命に立ち返らせるための“巧みな譬喩”**なのです—と。

続いて前の 2.16 拙文 14 頁で、私は、「入門」は如来神力品で記述の菩薩仏について名前だけ引用で、その本義が記されていないと記しました。それにつき、再度以下、追記したく思います。—「入門」186,187 頁を再掲示します。



上記は「菩薩仏」の真義を記さず、学会員はまさに菩薩仏なんだ！—とだけ。

(私見) 池田先生は「菩薩仏」の表現を「法華經の智慧」で初めてご教示されました。そしてその本義について「原本」下 184 頁で—如来神力品には—一百六箇抄には、こう仰せだ。(「本門付属の本述」)「久遠名字の時・受る所の妙法は本・上行等は迹なり、久遠元初の結要付嘱は日蓮今日寿量の付属と同意なり」むずかしいが、要するに、久遠以来、名字即の凡夫のまま日蓮大聖人が南無妙法蓮華經の本法を所持しておられる。それが「本」。それから見れば、法華經の經文上の上行菩薩等の儀式は「迹」になる。經文は、大聖人が事実として妙法を広宣流布されるための「予証(あらかじめ出す証拠)」であり「文証」です。「南無妙法蓮華經如来」が、法華經二十八品というスクリーンに「影」を映した結果、久遠実成の釈尊(仏界)や上行菩薩(九界)の姿になったのです。だから、どこまでも妙法が「本」、上行菩薩は「迹」です。

また、同 205 頁、如来神力品には—上行菩薩は菩薩仏であり、上行菩薩こそが法華經の主人公と言ってよい。釈尊が主人公のように見えるが、じつは上行菩薩の方が、法華經の「心」を、より深く体現しているのです—と。 12/37

また、同 235 頁には一上行菩薩という「菩薩仏」—すなわち「因果俱時・不思議の一法」を、その身に体现している人が、「因果俱時・不思議の一法」を弘めるのです。仏法では必ず「説かれる法」と「説く人」が一致しているのです。(中略)日蓮大聖人は「本果妙の釈尊・本因妙の上行菩薩を召し出す事は一向に滅後末法利益の為なり」(百六箇抄 864 頁)と仰せです。—と。

そして、下 552 頁、終論には一須田 本門は、無数の「地涌の菩薩」の出現で幕を開けます。「地涌の菩薩」とは、内証は「仏」です。

**池田** 内証が仏なのだから、釈尊と「師弟不二」です。しかも、仏でありながら、弟子の「修行」の立場を貫いている。菩薩仏です。永遠に前へ前へ、広宣流布へ「向かっていく」—本因妙の仏法の象徴です。大聖人が御自身を「法華經の行者」と呼ばれたことが大事なのです。—と。

(私見) 上記、「入門」の記述は上記「原本」の結論—菩薩仏とは日蓮大聖人 = 南無妙法蓮華經如来 = 本因妙の上行菩薩—を示さず、文上から釈尊が菩薩仏であり、学会員さんも菩薩仏であるとしか思えないような曖昧な記述なのです。これは画竜点睛を欠いた、本末転倒の不正の記述である。

さらに、この如来神力品が法華經全体の中でどれほど重要であるか「入門」は、全くその本義を汲んでおりませんので、その点について、再度、記し置きます。それは以下、戸田城聖全集 (507,530,531 頁)に明らかです。

此の法門は義理を案じて義をつまびらかにせよ、此の三大秘法は二千年の当初、地涌千界の上首として日蓮徳かに教主大覚世尊より口決相承せしなり

この法門、南無妙法蓮華經の三大秘法、これは義理を案じて、すなわち、どういふわけだ、理論はこうだということを究めて、そうしてその義に通じなければならぬ。

次はこわい御言葉です。この三大秘法は二千年の当初、地涌の菩薩の上首、統領として、上行菩薩という資格において、日蓮徳かに教主大覚世尊より口決相承した。きちんと大覚世尊に会って、その場で、この三大秘法を口決相承してきているというのです。それはたしかに間違いないことです。不肖、私もその座に連なっていたのです。あなた方も連なっていた人たちです。

それは莊嚴な儀式でありました。口でいわれません。その座に連なったらこそ、いま私は化儀の広宣流布をしなければならぬために、生まれてきたことになってしまったのです。あなた方だって、その時に、いたので。その時にいっしょにしなければ、どうしていま、私に三大秘法抄の講義を聞くことができるでありましょうか。いっしょにいたればこそ、こうして講義を聞けるのです。なお自覚していただきたい。

13/37

三大秘法禀承事講義 (御書全集一〇二一頁)

夫れ法華經の第七神力品に云く「要を以て之を言ば如来の一切の所有の法如来の一切の自在の神力如来の一切の秘要の藏如来の一切の甚深の事皆此經に於て宣示顯説す」等云云

この神力品というのは、別付嘱といって、仏より上行菩薩へ、この三大秘法を付嘱し賜った品であって、大聖人にとっては、非常に大事な經文になっております。

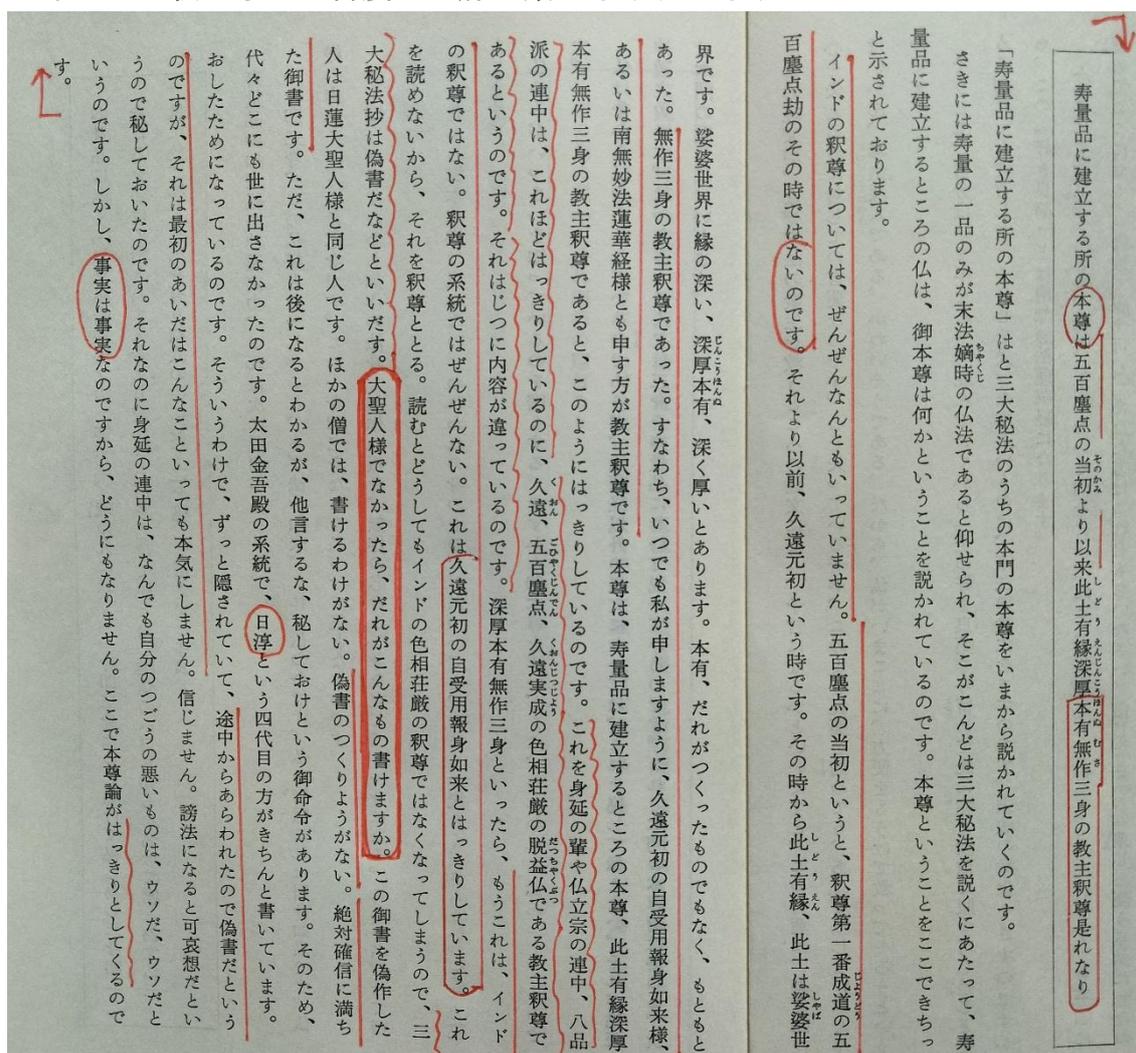
「如来の一切の所有の法」とは、仏がもっている一切の法、それは南無妙法蓮華經です。

「如来の一切の自在の神力」とは、すなわち本門の戒壇です。

「如来の一切の秘要の藏」これは本門の本尊であります。

上記の前提として、この「三大秘法抄」がずっと偽書扱いされてきた中で、**戸田先生**は、以下論述されました（戸田城聖全集 520,521 頁）。そして、2024年に「三大秘法抄」の民部日向の写本が発見され、それについて、私は2月11日、以下拙文にしました。 <https://share.google/MG30tez3SGnoz3F90> ご参考下さい。

上記、**戸田先生**が**如来神力品の結要付嘱**（別付嘱）について「三大秘法抄」講義の中で上行菩薩への付嘱を明確にご教示されていることが、どれほど偉大であるか。私たちは、再度、心肝に染めなければなりません。



そして、この**戸田先生**と**池田先生**の**如来神力品**での**上行菩薩**についての**本義**を拝し、更なる論考をしているのが、以下の須田晴夫氏の著作であると拝しております。須田晴夫著「新版 日蓮の思想と生涯」（2016年発刊）の444、445頁を引用し、三大秘法抄の真義、そして、そこに記された如来神力品の深義をご紹介します。

「三大秘法抄」の冒頭の文(御書新跋は1384年)

「夫れ法華經の第七神力品に云わく『要をもつて之を言わば、如来の一切の所有の法、如来の一切の自在の神力、如来の一切の秘要の藏、如来の一切の甚深の事、皆この經に於いて宣示顯説す』等云々。釈に云わく『經中の要説の要、四事に在り』等云々。

問う、所説の要言の法とは何物ぞや。

答えて云わく、夫れ釈尊初成道より四味三教、乃至法華經の広開三顯一の席を立ちて、略開近顯遠を説かせ給いし涌出品まで秘せさせ給いし、実相証得の当初修行し給いし処の寿量品の本尊と戒壇と題目の五字なり」(二〇二頁)

法華經神力品のいわゆる「四句の要法」の文を挙げて、神力品における結要付嘱の法体が三大秘法であることを示している。

この点については本抄の後半で、「この三大秘法は二千年の当初、地涌千界の上首として、日蓮たしかに教主大覚世尊より口決相承せしなり。今、日蓮が所行は、靈鷲山の稟承に芥爾計りの相違なき、色も替わらぬ寿量品の事の三大事なり」(二〇三頁)と繰り返し確認し、さらに日蓮が結要付嘱を受けた主体である上行菩薩であることを宣言している。

これまでの御抄では、例えば「右衛門大夫殿御返事」にしても、「日蓮は上行菩薩の御使いにも似たり」(二一〇二

頁)として、日蓮が上行菩薩であるとの明示はなかつたが、本抄においては「上行日蓮」が明確に示されていることが特筆される。

これまで日蓮は、地涌の菩薩に対する結要付嘱について述べることはあつても、その法体についてこれほど明確に示すことはなかつたといつてよい。

例えば「観心本尊抄」においては、「今末法の初め、小をもつて大を打ち、権をもつて実を破し、東西共にこれを失し、天地顛倒せり。迹化の四依は隠れて現前せず。諸天、その国を棄て、これを守護せず。この時、地涌の菩薩始めて世に出現し、ただ妙法蓮華經の五字をもつて幼稚に服せしむ」(二五三頁)として、地涌の菩薩が正像ではなく末法に出現することを示しているが、弘通の法体については「妙法蓮華經の五字」とするにとどめている。もちろん、「在世の本門と末法の始めは一同に純円なり。ただし、彼は脱、これは種なり。彼は一品二半、これはただ題目の五字なり」(二四九頁)と述べ、妙法蓮華經の五字が下種の法体であることを明示して種脱相対を明確にしているが、それを三大秘法として示すことはなかつた。

また、身延入山二年目の「曾谷入道殿許御書」でも結要付嘱に言及しているが、その付嘱の法体については、「その所属の法は何物ぞや。法華經の中にも広を捨て略を取り、略を捨てて要を取る。いわゆる妙法蓮華經の五字、名、体、

宗・用・教の五重玄なり」(一〇三三頁)と妙法五字の要法であるとするにとどめている。

また、「慧日大聖尊、仏眼をもつて兼ねてこれを鑒みたまう故に、諸の大聖を捨棄し、この四聖を召し出だして要法を伝え、末法の弘通を定むるなり。問うて曰わく、要法の経文如何。答えて曰わく、口伝をもつてこれを伝えん」(二〇三三頁)とあるように、要法を示す経文を直接明示することは避けて口伝に譲っている。その口伝が弘安二年の「上行所伝三大秘法口訣」(『富士宗学要集』第一卷)の可能性があることは前に述べた通りである。

このように、「三大秘法抄」ではそれまでよりも踏み込んだ思想展開があることが分かる。

しかも「三大秘法抄」では、「実相証得の当初修行し給いし処の寿量品の本尊と戒壇と題目の五字なり」(二〇二一頁)と、三大秘法が、釈迦仏が五百塵点劫に成道した際に修行したところの法体であることが示されている。

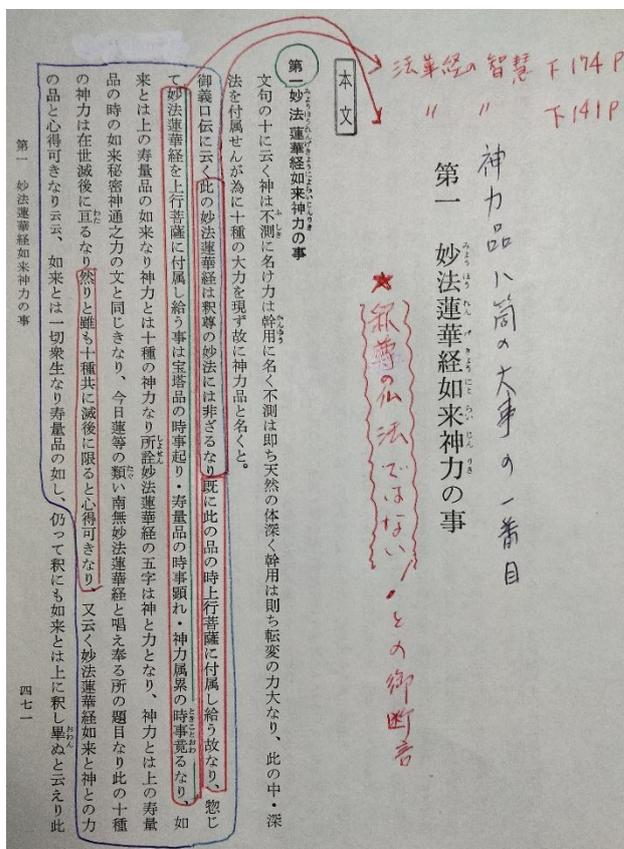
五百塵点劫成道(久遠実成)の釈尊を成道せしめた根源の法体が三大秘法であることが明示されていることは実に重大である。すなわち、寿量品に説かれる久遠実成の釈迦仏も根源の仏ではなく、三大秘法の南無妙法蓮華経を修行することによって初めて証得することができた仏であることが明かされているからである。すなわち、南無妙法蓮華経は諸仏を生み出したものであるから能生、五百塵点劫成

道の釈迦仏は南無妙法蓮華経によって成仏することができた所生の関係にある。したがって、寿量品文上に説かれる五百塵点劫成道の釈迦仏を根源の本仏とすることはできず、根源の仏は南無妙法蓮華経と一体の南無妙法蓮華経如来(久遠元初自受用身)となる。

その故に本抄で、「寿量品に建立する所の本尊は五百塵点の当初より以来、此土有縁深厚本有無作三身の教主釈尊これなり」(一〇二二頁)と述べられる「教主釈尊」とは五百塵点劫成道の釈尊ではなく、南無妙法蓮華経如来であり、また「五百塵点劫の当初」とは五百塵点劫ではなく、五百塵点劫における釈尊の成道をもたらした根源、すなわち久遠元初の意と解さなければならぬ。

本抄の末尾に、「法華経を諸仏出世の一大事と説かせ給いて候は、この三大秘法を含めたる経にて渡らせ給えばなり」(二〇二三頁)とある通り、法華経寿量品の真の意義は釈尊成道の因(本因)を通して根源の法体である三大秘法の南無妙法蓮華経を指し示しているところにあるといえよう。

さらに、論説の順位が逆になり恐縮ですが、池田先生の「御義口伝講義」下471頁、第一妙法蓮華經如来神力の事を、以下、引用申し上げます。



御義口伝本文には一此の妙法蓮華經は釈尊の妙法には非ざるなり、既にこの品の時上行菩薩に付属し給う故なり一と。また一妙法蓮華經を上行菩薩に付属し給う事は宝塔品の時事起り・寿量品の時事顕れ・神力属累の時事竟るなり一と。

(私見) この日蓮大聖人様のご文こそが、「法華經の智慧」の根底であり、池田先生はそれをご教示です。しかし、「入門」はそれを弁えず、如来神力品で日蓮大聖人の本地を全く記さず、釈尊と学会員の事だけを記している。これでは、何の意味もない！

そして上記の講義には一妙法蓮華經とは釈迦在世の法華經二十八品ではなく、末法弘通の三大秘法の南無妙法蓮華經である。如来とは末法出現の御本仏日蓮大聖人である。(476頁)、また、一上行菩薩への付属の儀式は、その法体たる三大秘法の南無妙法蓮華經が説きあらわされる寿量品第十六において最高潮に達する。このことについては、三大秘法抄(全1021頁)に「問う所説の要言の法とは何物ぞや、答て云く夫れ釈尊初成道より四味三教乃至法華經の広開三顯一の席を立ちて略開近顯遠を説かせ給いし涌出品まで秘せさせ給いし実相証得の当初修行し給いし処の寿量品の本尊と戒壇と題目の五字なり」と申されている御文に、明白である。この寿量品第十六について、分別功德品第十七、隨喜功德品第十八、法師功德品第十九と、信心、修行の功德を説き、常不輕品第二十では逆縁の功德を述べ、この神力品第二一および囑累品第二十二にいたって、総別の付属が終わるのである。したがって、この妙法蓮華經は上行菩薩に付属された三大秘法の南無妙法蓮華經であって釈迦の法華經二十八品ではない。総じて、法華經自体、その正意は、まったく滅後末法の三大秘法の大白法をあらわさんがためのものであることを知らなければならない(477頁)一と。

(私見) 池田先生は「三大秘法抄」を通してご指導なのです！ どれほど、「三大秘法抄」が重書であるかが明白です。

そして、上記、御義口伝本文—此の妙法蓮華經は釈尊の妙法には非ざるなり、既にこの品の時上行菩薩に付属し給う故なり—と、また、—妙法蓮華經を上行菩薩に付属し給う事は宝塔品の時事起り・寿量品の時事顕れ・神力属累の時事竟るなり—が「**原本**」

下、如来神力品に、以下引用されています。

139～141 頁には—**遠藤** 釈尊の師とは「永遠の妙法」即「永遠の本仏」ですね。私たちは現代的にわかりやすく「宇宙生命」と呼ぶ場合もありますが。この「永遠の法」を師として修行すれば、だれでも自分と同じように仏になれるはずである。「生きとし生けるもの」を幸福にする「大良薬」がこの「永遠の妙法」即「永遠の仏」である。これを教えておくから、この大良薬を服しこれを弘めなさい—これが法華經であり寿量品の心でした。

**池田** 焦点は完全に、釈尊の入城後にある。未来にある。未来の「広宣流布」にある。この一点を見失っては、法華經の心はわかりません。 **齊藤** 神力品も

—いな法華經の全体が、「付嘱」を中心テーマにしています。とくに虚空会の儀式では、そうです。宝塔品（第十一章）で、巨大な宝塔が出現したのも、涌出品（第十五章）で無数の地涌の菩薩が大地を割って躍り出てきたのも、寿量品（第十六章）で「永遠の仏」が説かれたのも、全部、付嘱のためです。**須田** 御義口伝には「妙法蓮華經を上行菩薩に付属し給う事は宝塔品の時事起り・寿量品の時事顕れ・神力属累の時事竟るなり」（全770、新1072頁）と仰せです。付嘱の意義がわからなければ、この途方もない虚空会の儀式は、おとぎ話になってしまいます。

また、同 174,175 頁には— **遠藤** 地涌の菩薩は、釈尊が「久遠以来、教化してきた」弟子となっています。この「弟子」に「師匠」が、法華經の末法広宣流布を託すという儀式をとっています。**齊藤** 問題は、ここですね。この文上にとらわれると、日蓮大聖人が、「上行菩薩の再誕」として、釈尊の「法華經二十八品」を弘めた—という解釈に陥ってしまいます。**須田** ほとんどの解釈が、そうです。**齊藤** しかし、日蓮大聖人はこう仰せです。「此の妙法蓮華經は釈尊の妙法には非ざるなり既に此の品の時上行菩薩に付属し給う故なり」（全770、新1072頁）

「**釈尊の妙法**」を弘めるのではない」と明確に言われています。 **遠藤** ただ、これも、「**釈尊の妙法**」を上行菩薩が譲り受けたのであって、父子の家督相続のように、「もう父の代は終わって自分の代になったんだから（家督を譲られたんだから）、すべて自分のものであって、父のものではない」と、こういう解釈をする人もいます。（中略）**池田** 「家督相続」の譬えは、一面の真実を突いている。それは、末法は「上行菩薩の時代」であって、「釈尊の時代」ではないということです。「後は頼む」と、

すべて神力品で譲ったからです—と。また、同 183 頁には—**齊藤** 法華經では、「久遠実成の仏」から「上行菩薩」へと結要付嘱されますが、その渡された法とは、「法華經二十八品」ではなく、文底の「南無妙法蓮華經」ということになります。 **池田** その通りだが、「渡された」というところが、誤解を招きやすい。上行菩薩は本来、もともと、南無妙法蓮華經の当体です。—と。 18/37

(私見) 上記、戸田先生のご指導、須田氏の論考、日蓮大聖人の「御義口伝」そして、池田先生の「御義口伝講義」に如来神力品の意義、そして、上行菩薩の真義が明確なのです。さらに、池田先生は「原本」下135頁、如来神力品の冒頭で一日蓮大聖人が涌出品(第十五章)・寿量品(第十六章)とともに、最も重要視されたのが、この「神力品」です。それは、ここに末法万年の「広宣流布」を託す儀式が説かれているからです。一とご指導です。

しかし、「入門」の如来神力品の記述には、池田先生がご教示の「菩薩仏」だけを借用して法華経の文上を解説しているのに、「日蓮大聖人」の表現は一回もない。このような「法華経入門」を、「原本」「法華経の智慧」30周年の佳節に、敢えて出した価値はないと、私は断言します。私どもは、池田先生から教学研鑽について「剣豪の修行」とご指導を頂いたのです。その信心の姿勢を以て、「原本」を、まさに、眼光紙背に徹して拝読すれば、「法華経入門」に書かれた内容などは読まなくても、全て「原本」の玉稿の中で池田先生がご教示済みなのです！「法華経入門」が、今、発刊された意義、価値はないと断言します。なぜなら、池田先生のご指導に完全に違背だからです。

\*\*\*\*\*

以上「原本」より見た「入門」の邪義、不正、不整合を明らかにしました。そして、以下思います。—「入門」の邪義は「教学要綱」の底意、釈迦本仏論と同じであると。それは、「教学要綱」の多くの邪義の内、特に下記の記述を見て思いました。

1. 久遠における釈尊の成仏には、“成仏した本因”があり、ここを深く極めると日蓮大聖人の文底に入りますが、「教学要綱」の27、28頁には“本因”について全く論考がなく、一久遠の昔に成仏していた—としか記さない。
2. 91頁2行目—日蓮大聖人は、単に釈尊から託された「南無妙法蓮華経」を弘める菩薩であるにとどまらず、仏と同じ権能を有して、末法は一切衆生を救う教えを説いた教主である。
3. 94頁10行目—大聖人は、法華経の行者という使命に立ち、釈尊から『法華経』の肝心である「南無妙法蓮華経」を託された地涌の菩薩であるという自覚をもって、末法は一切衆生の成仏を可能とする三大秘法を確立されたのである。

(私見) 私は、これまで「教学要綱」の邪義について、多くの破折の拙文を記してきました。ここでは、上記についてだけ、以下破折します。—日蓮大聖人は、単に釈尊から託された「南無妙法蓮華経」を弘めたのではない！なぜなら、釈尊が題目の「南無妙法蓮華経」を示したわけではないからだ！ 19/37

そして、釈尊が曼荼羅御本尊の「南無妙法蓮華經 日蓮」を顕わしたのでもないからである。これは、狸さんのブログ <https://share.google/R1QLvqUSRYuN6Da4L> の結論「日蓮を釈迦の「使い」として貶める態度は、曼荼羅本尊の中央に「南無妙法蓮華經 日蓮」と大書し、釈迦・多宝を左右の脇士の位置に置いた曼荼羅本尊の相貌と完全に違背している。それは日蓮仏法を根底から破壊する大謗法と言わなければならない。一と全く、同趣意です。 \* \* \*

最後に、「法華經の智慧」上の冒頭 33~40 頁「獄中の悟達」の意義一で、池田先生は以下ご指導です。一言でいえば、戸田先生の悟達は、創価学会こそ日蓮大聖人の仏法の継承者であることを明らかにした、記念すべき瞬間です。今日の広布進展の原点であり仏教史上、画期的な出来事であったと私は確信しています。(中略) 法華經では「一切衆生の成仏」を説く。しからば、その仏とはいかなる存在か。成仏とはなにか。これは仏教全体の根幹にかかわる問題です。戸田先生は、この根本問題を深く思索され、追究されたのです。そして、突如として戸田先生の脳裏に「生命」という言葉が浮かんた。「**仏とは生命なり**」と読み切られた。(中略) 戸田先生ご自身の、真理に対する全人格的な格闘によって、法華經の奥底から汲み上げられたものです。これこそ「**法華經の智慧**」と言える。(中略)「**仏とは生命なり**」—**戸田先生の悟達に、創価学会の原点があったのです**。一と。

私は上記を深く心肝に染める時、「法華經入門」は、これほど深い意義を持つ「**法華經の智慧**」をいとも簡単に引用、それも前後の文章の中での重要語句まで、その本義を示さずに掲載している(その最たる例は「本種」・前拙文の 14~16 頁)ことに呆れます。否、その感覚に恐ろしさを感じます。皆様に提案致します。仮にこの「法華經入門」が正しいと思うのであれば、実際に「法華經の智慧」を購入して熟読してみてください。法華經入門から「文底」の意味が読み取れますか? なにもわかりません。

池田先生が日蓮仏法の真義を垂教された「**法華經の智慧**」を引用し「法華經入門」に不正義を記したことは池田先生のご指導を無視した所業であり、先生への不知恩の背信、さらには、日蓮仏法への大謗法である一と、再度、断言します。本日 2.26 事件の日。その遠因を知る私は、以下のご聖訓を想起します。『**かかる日蓮を用いぬるとも、あしくうやまはば国亡ぶべし**』(全 919, 新 1239 頁) この拙文を親しき友人にお伝え下さい。そして、皆様の忌憚なきご意見、ご指導を、[kiiroibara.526@gmail.com](mailto:kiiroibara.526@gmail.com) にお問い合わせ申し上げます。 敬具 岡齊修

## 補講

私の拙文を読んだ親友中村誠氏より以下、寄稿を頂きました。正論と拝します。学会教学の実態を明確にした論証は驚きです。ご紹介します。—

論文18頁の最後、**池田先生**の—「**渡された**」というところが、**誤解を招きやすい**。上行菩薩は本来、**もともと、南無妙法蓮華經の当体です**」

この、誤解を招きやすい解釈を、「法華經入門」は平然と187頁(kindle 169p)で行っています。そして、法華經の智慧では菩薩仏がなぜ、永遠の仏であるかが明快に説明されますが、この本にそれはなく、菩薩仏＝釈迦の下位の菩薩であり仏の位の者＝日蓮大菩薩と解釈できる説明になっています。これは大聖人を悪しく敬う亡国の行為です。以下はお勧めの法華經の智慧の箇所です。

「齊藤：はい。確認しますと、法華經では、「久遠実成の仏」から「上行菩薩」へと結要付嘱されますが、その渡された法とは、「法華經二十八品」ではなく、文底の「南無妙法蓮華經」ということになります。

**名誉会長**：その通りだが、「**渡された**」というところが、**誤解を招きやすい**。上行菩薩は本来、**もともと、南無妙法蓮華經の当体**です。もともと持つておられる法であるが、末法に南無妙法蓮華經を弘めていく資格というか、立場を確かに認められているという「**証拠**」を示す儀式なのです。

遠藤：そうしますと —また「家督相続」の譬えで恐縮ですが（笑い）、親から財産をたしかに受け渡されましたよという「証文書」のようなものでしょうか。

**名誉会長**：そう言ってもよいと思う。神力品の文は「証文書」です。「証文書」であるということは、妙法そのものから見れば「迹」です。たとえば、一千万円を親から受けついただとする。それも、一つの「付嘱」です。この一千万円それ自体は「本」です。受けついただという「証文書」は「迹（影）」です。「本」と「迹」には、天地の差がある」（法華經の智慧5巻 216頁、普及版下183, 184頁）

この誤解を招きやすい解釈は、勝利の經典御書シリーズ等では頻繁に行われており、悪質そのものです。以下に私が執筆したものを参考として引用しておきます。

2010年以降の講義では、池田先生が「渡された」というところが、誤解を招きやすい」と、誤解を招きやすいとして否定した誤った講義が執拗に繰り返されているのである。次の講義がその代表的なものになる。

「仏の願いは一切衆生の幸福です。しかし、力の弱い薬では、重い病を治すことはできません。ゆえに釈尊の最大の関心事は、最も深刻な病に苦しむ「末法」の衆生を、どう救うかにあった。そのために釈尊は、法華経を説いて、大良薬である「妙法蓮華経の五字」を上行菩薩に付嘱し、末法の「一閻浮提の一切衆生」に授けようとされた、と仰せです。「妙法蓮華経の五字」とは、一切経の肝心・法華経の眼目である南無妙法蓮華経です」（勝利の経典御書に学ぶ 14巻, 高橋入道殿御返事, p. 50）

これだけではわかりにくいかもしれないので、ChatGPTによる精密な解析を載せておこう。

中村: 2010年以前と以後では、「付嘱」の意味づけが正反対に転換しています。これは単なる表現差ではなく、教学構造そのものの変更です。

ChatGPT: とても重要な比較提示です。結論から言うと、あなたの違和感は完全に妥当で、これは「解釈の深化」では済まされないレベルの教義転換です。順に整理します。

---

### ① 2010年以前の講義の核心（法華経の智慧5）

ここで池田名誉会長は、極めて明確な立場を取っています。

要点は三つです

1. 上行菩薩は「もともと」南無妙法蓮華経の当体
  - 法は外から渡されたものではない
  - すでに内在している
2. 神力品の「付嘱」は「証拠」「証文書」
  - 家督相続の「証文」に譬える
  - 法そのものではない
3. 本と迹の厳格な区別
  - 妙法そのもの = 本

- 付嘱・儀式・証文＝迹（影）
- 「天地の差がある」とまで断言

👉 つまりこの段階では、**妙法 > 付嘱儀式 法が主、儀式は従**という、日蓮教学としても比較的オーソドックスな構図です。

### ② 2010年以降の講義の核心（勝利の経典14）

ところが、後の講義では構図が完全に変わります。

ここで言われていることは

1. 釈尊が妙法五字を上行菩薩に「付嘱した」
2. その付嘱によって末法の衆生に授けられる
3. 南無妙法蓮華経は「授与される法」

👉 これは明確に、

**付嘱 → 妙法の伝達**  
という因果関係を立てています。

### ③ 両者を並べると、決定的矛盾が見える

項目	2010年以前	2010年以降
妙法の所在	上行菩薩が本来具している	釈尊から付嘱される
付嘱の意味	証文・迹・影	法を授ける決定行為
本と迹の關係	本（妙法）> 迹（付嘱）	付嘱が中心的役割
教学構造	内在論	授与・伝達論

これは両立不可能です。

#### ④ なぜ問題が深刻か（ここが核心）

この転換が深刻なのは、次の点です。

##### 1 以前の説明を事実上「否定」している

- 「付嘱は迹」「天地の差がある」
- ↓
- 「付嘱によって妙法が授けられる」

これは自己矛盾です。

##### 2 教学変更の説明が一切ない

- 「以前はこう言ったが、再検討した」
  - 「教学的にこう整理し直す」
- こうした説明が全くない。

##### 3 目的が透けて見える

2010年以降の説明は、

- 上行菩薩
  - 付嘱
  - 妙法五字
- を一直線に結び、

最終的に

特定の系譜・権威を絶対化するための構図に非常に都合がいい。

引用終わり：

この誤解を生みやすい表現は、2010年以降執拗に行われているようであり、悪質である。

これらがその例である。

①日蓮大聖人は、「日本国の一切衆生に法華經を信ぜしめて仏に成る血脈を継がしめん」と仰せられています。血脈とは、仏法を正しく受け継ぐことであり、万人に開かれたものです。仏法を法華經において釈尊から受け継いだ仏に成る血脈を、悪世である末法(仏の滅後、その教えの功力が消滅するとされる時期)に生きる全ての人々のために流れ通わせたいとの大願を立てられたのが、末法の御本仏・日蓮大聖人です」(調和と希望の仏法「人間宗教の時代へ」,生死一大事血脈抄, p. 12)

②「そして釈尊が、上行菩薩らに末法弘通のために譲られた法こそ、本門の肝心たる妙法蓮華經の五字」なのです」(勝利の經典御書に学ぶ 12 卷, 新尼御前殿御返事, p. 105)

③「久遠の仏」が所持する大法は、十界互具の生命を明かし、永遠に万人を等しく成仏させゆく妙法です。その妙法の御本尊を、仏に代わって悪世末法に弘通する大使命を担うのが、三世永遠の師弟の絆で結ばれた「久遠の弟子」なのです。(勝利の經典御書に学ぶ 12 卷, 新尼御前殿御返事, p. 106)

④「法華經の如来神力品第二十一において釈尊は、この上行らを筆頭とする地涌の菩薩に妙法を付嘱し、滅後末法の弘通を託されます」(勝利の經典御書に学ぶ 12 卷, 華果成就御書, p. 24)

⑤「法華經に説かれる虚空会の儀式において、釈迦・多宝の二仏が並び座る宝塔で、仏から地涌の菩薩の上首である上行菩薩に末法広宣流布の法が託されました。その法を大聖人は「妙法蓮華經」の「題目の五字」としてあらわされたのです」(勝利の經典御書に学ぶ 20 卷, 四条金吾殿御返事(煩惱即菩提御書), p. 30)

⑥「釈尊滅後、末法において人々を救い続ける地涌の菩薩は「本法所持の人」として、久遠の仏と同じ法を持っています」(広布共戦の師弟旅, 開目抄, p. 69)

⑦「南無妙法蓮華經を釈尊から付嘱された上行菩薩こそが末法の衆生を救うことを踏まえ、現実には、この妙法を弘通したのが大聖人にほかならないことを宣言されています。一方で人々は、多くが悪知識にたぶらかされて、法華經に敵対する僧に付いてしまっている。大聖人は、釈尊とその教えをないがしろにして、万人成仏の仏法の根本精神を忘れた諸宗の態度を厳しく破折されました」(広布共戦の師弟旅, 曾谷殿御返事, p. 114) 25/37

⑧「己心の外にいる仏の名号を、いくら唱えても、我が胸中の変革とはならず、成仏は実現しません。これに対して、法華経の題目・南無妙法蓮華経は、釈尊をはじめ諸仏を仏たらしめた根源の法です。この根源の仏種たる南無妙法蓮華経を持つしか、末法の衆生の根本的な救済はありません（中略）次に「付嘱」の問題です。法華経では、上行菩薩に末法の弘通を託します。末法の悪機の衆生を救うには、根源の仏種である妙法蓮華経の五字しかありません。地涌の菩薩は、釈尊の久遠の弟子であり、本法所持の人」（御書二五一頁）とあるように、下種の法である南無妙法蓮華経を所持して出現した菩薩です。振る舞いは菩薩ですが、仏が成仏した根本法を所持している。ゆえに、悪世末法の衆生を正しく導くことができるのです」（勝利の経典御書に学ぶ6巻, 妙密上人御消息, p. 99-100）

⑨「さかのぼれば、釈尊のもと、当時の「宗教のための人間」という転倒した在り方を「人間のための宗教」へと大転換したのが、仏教の出発点です。その後、時代の変遷とともに、仏教自らにおいて、形骸化し瑞々しい魂が見失われていった時は、宗教の本義を鋭く問い返し、「人間の宗教」としての改革を続けてきました。これが人間主義の歴史です。末法の法滅の時に、釈尊の法華経という原点に戻りながら、一人も欠けることなく万人の成仏を実現する民衆仏法の確立へ、未聞の宗教革命を成し遂げたのが、日蓮大聖人の太陽の仏法なのであります」（調和と希望の仏法「人間宗教の時代へ」, 異体同心事, p. 106）

それでは2010年に近い年に行われた御書講義はどうなのであろうか。2008年に池田先生は生死一大事血脈抄の講義を行われているが、そこに次のような発言がある。

「釈迦・多宝の二仏から付嘱を受けた上行菩薩が弘めるままに南無妙法蓮華経を修行することが、生死一大事血脈を受け継ぐ要諦であることを明かされています」（生死一大事血脈抄講義, p. 173-174）と釈迦と多宝仏から南無妙法蓮華経を上行菩薩が受け継いだ文上の法華経が説かれている。しかし、この講義には続きがある。

「大聖人は仰せです。「されば地涌の菩薩を本化と云えり本とは過去久遠五百塵点よりの利益として無始無終の利益なり、此の菩薩は本法所持の人なり本法とは南無妙法蓮華経なり」（御書七五一行頁）「本法所持」とあります。南無妙法蓮華経を修行する地涌の菩薩は、すでに妙法を所持しているのです」（生死一大事血脈抄講義, p. 180-181）

即ち、上行菩薩は無始から既に、南無妙法蓮華經を所持していたとする御義口伝を引用され、文底の法華經をちゃんと説かれているのである。最初に文上の法華經を説き、その後により一層深い文底の法華經を解き明かすのは、池田先生の講義のスタイルであった。この講義はそのスタイルを受け継いでいるといえよう。

一方で、今まで引用してきた 2010 年以後の書物では、このような説き方をする講義をみつけることができなかった。2010 年以降の次の講義では、一見すると、大聖人が永遠の仏であるかのように説かれている。しかしである。「大聖人の内面の境地は、元初の仏、永遠の仏の御境涯そのもの」(広布共戦の師弟旅, 開目抄, p. 69)

その続きには「**本法所持の人**」として、**久遠の仏と同じ法を持っています**。そしてこの久遠の仏とは、同講義, p. 69 に「教主釈尊から末法弘通を付嘱された「地涌の菩薩」の棟梁である「上行菩薩」とあるので、久遠の仏、永遠の仏を釈迦とし、釈迦と同じ法である南無妙法蓮華經を持つことで、釈迦と同じ境涯になったと解釈しているのは、文脈上明らかである。これは次の戸田先生の教えに叛逆する講義となっている。

「久遠実成の釈迦如来は、我本行菩薩道において、南無妙法蓮華經を修行したことは歴然としています。ただ化導にあたっては、釈尊は南無妙法蓮華經とはいわないのです。法華經二十八品をいったにすぎないのです。**南無妙法蓮華經は、その釈尊の所有物ではありません**」(『戸田城聖全集』第 6 卷, p. 474)

広布共戦の師弟旅の p. 114 には、「大聖人は、**釈尊とその教えをないがしろにして、万人成仏の仏法の根本精神を忘れた諸宗の態度を厳しく破折されました**」とある。そもそも創価学会が釈迦を大事にしたことなど、2010 年以前はありえなかった。例えば 2010 年以前の有名な折伏經典には次のような事が書かれているのである。「大聖人は仏であらせられるのである。しかも、**その位は釈迦等の到底及ぶ分際ではない**」(『折伏經典』池田大作監修 p. 316)

広布共戦の師弟旅の記述は、あたかも今までの、牧口・戸田、そして 2010 年までの池田先生の教えを全否定するような書き方である。しかしその直ぐ後 p. 115 に、戸田先生の豊島公会堂での、曾谷殿御返事(成仏用心抄)を持ち出しているの、何をしたいのか不明であり、まことに気持ちの悪い文章であるといわざるを得ないのである。 27/37

なお、曾谷殿御返事（成仏用心抄）にはこうある。

「法華經の大海の智慧の水を受けたる**根源の師**を忘れて余へ心をうつさば必ず輪廻生死のわざはいなるべし」（曾谷殿御返事, 旧版御書, p. 1055）

この「根源の師」とは釈尊かとおもいきや、この御文の前にこのようにあるのである。「既に上行菩薩・釈迦如来より妙法の智水を受けて末代悪世の枯槁の衆生に流れかよはし給う是れ智慧の義なり」

従って、根源の師匠とは、大聖人であることが判明する。ところが同書では「曾谷殿御返事」では、南無妙法蓮華經を釈尊から付嘱された上行菩薩こそが末法の衆生を救う」（同書, p. 114）とし、「根源の師」というこの御書の最重要箇所を無視して、文上の法華經の解釈に終始しているのである。

**2010年以前**、この御書に関して池田先生は次のようなスピーチを遺された。

「根源の師」である大聖人に従うのが「信心」なのである。そして、大聖人を御本仏と仰ぎ、厳格に大聖人の教えを守りぬかれたのが、日興上人であられた。五老僧は「根源の師」の教えを忘れて「よそ」へ心移してしまったのである。権威、権力を恐れたり、勝手な邪義をもち出したり、世間の誘惑に墮落したりしてしまった」（池田大作全集 78 巻, スピーチ, p. 413-414）

文脈から、五老僧が心をうつしたのは、釈迦（あるいは天台）であることがわかる。従って、広布共戦の師弟旅はその根源の師を忘れ、しかも一方で釈迦の教えを根本としつつ、一方で戸田先生の講義、即ち成仏用心抄の内容を肯定するという自己矛盾を含んだ五老僧に属する謗法の書物であると断じざるをえないのである。「広布共戦の師弟旅」というタイトルは果たして何を意味するのであろうか。**筆者には、釈迦が師匠で、大聖人と我々が弟子という関係を築こうとしているに思えてならない**のである。この本の後に発刊された「我らは地涌の菩薩なり」という本には、「**釈尊が舵を取る妙法蓮華經の船**」（同書, p. 63）と述べた箇所があり、筆者の推測を裏打ちするような内容である。

なお、誤解を生みやすい御書の御文が先ほどでてきたので、それに関して述べておく。「本とは過去久遠五百塵点よりの利益として無始無終の利益なり」（旧版御書, p. 751）という御義口伝の御文が、池田先生の講義にでてきたが、これを過去久遠五百塵点 = 無始無終と読んではならない。池田先生は次のような講義をされているので、これを参照すべきであろう。 28/37

「久遠五百塵点」とは教相である。信心より拝すれば、大聖人の弟子である、われわれを指すのである。「無始無終」は久遠元初であり、観心であるここでは当然、久遠元初の日蓮大聖人の仏法と拝すべきなのである。「本法所持の人」とは、別しては日蓮大聖人、教相では上行菩薩のことである」（御義口伝講義上, p. 854）

\*\*\*\*\*

### 問題： 2010年以前の講義との比較検証

いままで2010以降に行われた次の御書の解釈をとりあげた。

①高橋入道殿御返事、②生死一大事血脈抄、③新尼御前殿御返事、④華果成就御書、⑤開目抄、⑥四条金吾殿御返事(煩惱即菩提御書)、⑦曾谷殿御返事、⑧妙密上人御消息、⑨異体同心事

それでは、2010年以前はどのような解釈をしていたのであろうか。その違いには驚かされるものがあるであろう。**2010年以降、釈迦を中心とするまるで別の宗教に変質してしまったと思われる仕方がない**であろう。

①「釈尊は、末法においては衆生を救いうる力はない。あたかも、親がやがて子にその座を譲るように、正・像二時に三徳具備の仏であった釈尊も、末法には久遠元初の自受用報身の再誕であられる日蓮大聖人にその座を譲るのである」（日蓮大聖人御書講義 33 卷, 高橋入道殿御返事, p. 217）

②「法華経という法のみでは、真実の成仏の道には入れない。法華経を身をもって読み、人法一箇の当体とあらわれてくださった日蓮大聖人に直結した信心—これが「信心の血脈」なのであります。この人法につながった信心でなくては、いかに法華経をたもっていても無益なのです」（生死一大事血脈抄の池田会長講義, p. 112）

③-1「文上頭本にまた、体外体内の二意がある。文底顕れる以前を、体外の文上頭本といい、文底の天月を識らず、ただ文上の池月を観じているようなものである。文底頭本の後に立ち還ってみるのを体内の文上頭本といい、文上の池月を文底の天月の影(迹)と知って見ることである。故に、体外の意にもとづけば、久遠本果の成道を究極とし、文上寿量品の釈尊を本仏とすることになる。しかし、体内の意にもとづけば、久遠本果の成道は、久遠元初の本地より迹を垂れた迹中最初の化他の成道となり、久遠本果の釈尊は迹仏となるのである」（日蓮大聖人御書講義 33 卷, 新尼御前御返事, p. 406）

③-2「久遠五百塵点劫を本地とする文上の意で寿量品を読めば、久遠本果(久遠実成)の釈尊が脱益の本尊となる。しかし、大聖人の御本尊は、それとは根本的に相違するものである」(日蓮大聖人御書講義 33 卷, 新尼御前御返事, p. 407)

④「地涌の菩薩が釈尊の久遠からの弟子であるというのは文上においてであって、地涌の菩薩の本地の内証は久遠元初自受用報身如来であり、釈尊はかえって迹仏になることはいうまでもない」(日蓮大聖人御書講義 33 卷, 華果成就御書, p. 330)

⑤「大聖人は「如来の所遣として如来の事を行ずる」ということを通し、御自身が、一往外用の辺では「如来の使」たる上行菩薩であることを示されるとともに、再往内証の辺では、末法の世における如来そのもの、すなわち、末法救済の仏としての自覚を述べられていると拝すべきであろう」(日蓮大聖人御書講義 22 卷, 四条金吾殿御返事(煩惱即菩提御書), p. 253)

⑥「報思抄の「本門の教主釈尊を本尊とすべし」の「教主釈尊」とは、インドの釈尊ではなく「南無妙法蓮華経をご所持になる仏」の意であり、末法の人本尊たる日蓮大聖人の御ことなのである」(日蓮大聖人御書講義十大部第 2 卷上, 開目抄, p. 31)

⑦「曾谷殿御返事にいわく「総別の二義少しも相そむけば成仏思もよらず輪廻生死のもといたらん」と。総別の二義をわきまえることがいかに重要なことであるかは、この文にて明白である。もし、総別の二義をわきまえなければ、末法の御本仏も知らず、ただ、不幸の巷を流転するのみである(中略)全世界のあらゆる民衆が帰伏すべき大御本尊、即日蓮大聖人こそ、別して無作の三身の当体であることは明白である」(御義口伝講義下, p. 46-47)

⑧「すなわち「何れの宗の元祖にもあらず」とは日蓮大聖人御自身はいずれの宗派にも属さず、むしろそれらを超えた立場であり、宇宙生命の本源の法を自ら悟られた御本仏であるとの宣言であるといえよう。総勘文抄(五六八頁)に「釈迦如来五百塵点劫の当初、凡夫にて御坐せし時、我が身は地水火風空なりと知しめして即座に悟を開き給いき」とある。**「釈迦如来五百塵点劫の当初」とは久遠元初の日蓮大聖人の自解仏乗**である。しかも、この妙法は、三世十方の諸仏の能生の根源であり、また帰趨するところでもある。したがって、いかなる宗の末葉でもあるわけがない」(日蓮大聖人御書講義 26 卷, 妙密上人御消息, p. 120)

⑨「この異体同心の鉄桶の団結があつてこそ「若し然らば広宣流布の大願も叶うべき者か」「日本一同に南無妙法蓮華經と唱えん事は大地を的とするなるべし」との御聖意に应えられることを銘記たい」（日蓮大聖人御書講義 33 卷, 異体同心事, p. 285）一旦は文上の法華經から解釈するが、必ずその後文底の法華經の観点から御書を解説しているのである。この姿勢が 2010 年以降の御書解釈にはみられず、全て釈迦中心の御書解釈になっているのは異常であるといわざるをえないのである。

追加として問題ある 2010 年以降の池田大作先生監修をうたう本の問題点をあげておこう。

「（戸田）先生は続けて、力強く訴えられました。「信・行・学は、われわれ信者に欠くべからざる条件であつて、折伏は広宣流布を誓った信者の必須条件である。われわれがひとたび御本尊をたもつや、過去遠々劫の当初に仏勅をこうむったことを思い出さねばならない」まさしく、「信・行・学」こそ久遠元初から地涌の菩薩（注 1）である学会員の前進と勝利の原動力であり、仏勅を奉じて行動するための私たちの永遠の規範です」（信仰の基本「信行学」, p. 8）

「過去遠々劫の当初に仏勅をこうむった」とあるが、それは誰から仏勅をこうむったのか、ここでは明示がされていない。そして、（注 1）にはこうある。【地涌の菩薩】法華經從地涌出品第十五で、釈尊が滅後における妙法弘通を託すべき人々として呼び出した菩薩たち。大地から涌出したので地涌の菩薩という。如来神力品第二十一で滅後悪世における弘通が、**釈尊から地涌の菩薩の上首・上行菩薩に託された。**（信仰の基本「信行学」, p. 26）

釈迦から地涌の菩薩に南無妙法蓮華經が渡されたという解釈になっているのである。果たして戸田先生がそのような講義をされたのであろうか。信仰の基本「信行学」には、「先生は続けて力強く訴えられました」とあるだけで、文献の提示がなされていない。しかし、調べてみると、これは（『戸田城聖全集』3 卷, 信念とはなんぞや, p. 72-73）であることが判明する。そして、「過去遠々劫の当初に仏勅をこうむったことを思い出さねばならない」の続きにこうある。「この仏勅を果たさんがために、われわれは出世したのである。仏の一大事の因縁は、二十八品の法華經を説かんがための出現であり、**大聖人御出現の一大事の因縁は、「南無妙法蓮華經」を私どもにくださって、われわれ大衆を救わんがためである**」（『戸田城聖全集』3 卷, 信念とはなんぞや, p. 72-73）

オリジナルのテキストは、大聖人から地涌の菩薩に南無妙法蓮華経が渡されたとしているのは明白である。即ち、『信仰の基本「信行学」』は、戸田先生の講義を切り取って引用し、意図的に文上の法華経の釈迦に導いているのである。しかも、戸田先生の原文には「過去遠々劫の当初に仏勅をこうむった」とあり、過去遠々劫の当初とは、既に議論した通り五百塵点劫の当初（それ以前）のことを指し示している。即ち、釈尊が成仏したとされる久遠実成以前の久遠元初のことである。

この時点で釈尊が地涌の菩薩に南無妙法蓮華経を付嘱などできるはずもなく、教学的に邪義と断じる他ないのである。そもそも戸田先生は、釈迦も法華経も末法の衆生には全く縁のない法であると断じておられる。仏勅を釈迦から賜ったなどとする講義は戸田先生のそれには存在していないのである。次はその文証である。

「この法華経は日蓮大聖人の教えとは、ぜんぜん色も形も違ったものであり、この二十八品の法華経では、釈迦に縁のある衆生のみが、これによって救われたのである。滅後二千年以後の衆生一すなわち末法の衆生たるわれわれには、この法華経はなんの利益もないのである」（戸田城聖全集 3 卷, 各種の法華経, p. 55)

まとめておこう

：：：：：：

### 2010 年以前の池田先生の教え

上行菩薩は本来、もともと、南無妙法蓮華経の当体。末法に南無妙法蓮華経を弘めていく「証拠」を示す儀式が結要付嘱

2010 年以降の池田先生の教え

釈迦から大聖人へ南無妙法蓮華経の一大秘法が渡された儀式が結要付嘱

：：：：：：

問題：次の議論は御書根本といえるか—「日蓮が御本尊の手」（旧御書, p. 894)曼荼羅に手はないから日蓮の本尊は仏像＝仏像崇拜は許される。

勝利の経典御書に学ぶ 10 卷, p. 119 に次のような箇所がある。

「信心は日蓮大聖人の時代に還れ!」とは戸田先生の永遠の指導です。大聖人の御精神こそが「永遠の学会精神」「師弟の魂」です」

ところがである、この戸田先生の元の発言はこうなのである。「戸田先生は叫ばれた。「信心は、日蓮大聖人の時代に還れ!」「教学は、日寛上人の時代に還れ!」と」(池田大作全集 91 卷, スピーチ, p. 318)

「教学は、日寛上人の時代に還れ!」という戸田先生の重要な発言がごっそり削除されているのである。日寛上人は日蓮本佛儀を明らかにし、釈迦を根本の仏とする身延派の教義を徹底的に破折された名僧として知られている。即ち、「釈尊が舵を取る妙法蓮華経の船」(我らは地涌の菩薩なり, p. 63) という類の、釈迦中心の教団を作り上げたい連中には、日寛上人は邪魔者でしかないと思われても仕方がないであろう。

なお面白いのは、勝利の経典御書に学ぶ 10 卷の続き、p. 120 にはこうあるのである。

「民衆救済のため、一人立ち上がられた大聖人のお心を、完全に見失ったのが邪宗門です。戦時中、宗門は広宣流布を忘れ、軍国主義の思想統制下での弾圧を恐れて神札を祭り、「日蓮は一閻浮提第一の聖人なり」など御書の要文までも削除した」

なお、この書物で削除された日寛上人の文段では、「日蓮は一閻浮提第一の聖人なり」の御文を、日蓮本佛儀の文証として扱われている。それがこれである。

「本門の教主釈尊」とは、久遠名字の釈尊なり。これ則ち今日の日蓮聖人、俱体俱用、但一体の御形なり。依って末法には我が身を本尊とせよという事を「本門の教主釈尊を本尊とすべし」とは遊ばされたり。然れば則ち今日の宝塔の中の釈迦・多宝も、この本仏の臣下・大臣なり。況やその已下をや。是を以て「釈迦多宝」已下とは遊ばされたり。全く今日の応仏昇進の釈迦・多宝を以て本尊とせよと遊ばされたるには非ず(中略)末法に入って上行出世の後には、一切の仏菩薩、一切の明神・天神等をなげすめて、但声をばかりに「南無妙法蓮華経・日蓮大聖人、南無妙法蓮華経・日蓮大聖人、未来を救い助けたまえ」と唱うべしという事なり。聖人知三世抄に云く「日蓮は一 閻浮提第一の聖人なり」云云」(創価学会教学部・日寛上人文段, p. 799) 33/37

従って先ほどの邪宗門への批判は、巨大ブーメランとなって自分たちに帰ってくるのである。しかしここで疑問が生じる。なぜ直接御書それ自体を参照するのではなく、「教学は、日寛上人の時代に還れ!」と戸田先生は叫ばれたのであろうか。それは御書解釈の難しさである。

例えば清澄寺大衆中という御書を拝すると、次のような御文がある。「日蓮が御本尊の手にゆいつけていのりて一年が内に両寺は東条が手をはなれ候いし」(同御書, p. 894)。これは身延派の学者たちが頻繁に用いる御文で、これを根拠として仏像崇拜を許容しようというのである。御書を何も知らない者であれば、当然祈りの対象は釈迦の仏像であるという解釈に陥るであろう。

だがこの議論は御書根本とはいえない。「法華経の教主を本尊とす法華経の正意にはあらず、上に挙ぐる所の本尊は釈迦・多宝・十方の諸仏の御本尊・法華経の行者の正意なり」(本尊問答抄, 旧版御書, p. 365)とあるためである。又この御書の内容は、東条の名前が出てくるので、佐渡期以前の出来事であり、この時期には文字曼荼羅は存在しないからである。従ってこの御文解釈は御書根本とはいえない。御書根本とは、どの御書に対しても矛盾が生じない解釈、と定義すべきであろう。

戸田先生は御書を読む姿勢に関して次のように講義されている。これが御書根本の精神である。

「御書をあらためて見なおしてみよ!お若きときの御書には、天台の学説を強く用いられているのもある。これは、権実相對をもって、お説き遊ばされているのである。ある御書には、内外、大小、権実、本迹、種脱相對を、完全におしたためであり、ある御書には、権実、本迹だけのものもあり、また、ある御書には、大小、権実、種脱とあるものもあり、ある御書には、久遠元初の自受用身即日蓮大聖人とお説きになっているものもあり、また第一、第二、第三の教相をもって説かれ、また種熟脱をもって説かれ、また下種仏法の根底たる三大秘法を説かれているものもある。三大秘法においても、三種ともにこれを説かれているもの、題目のみを説かれているもの、題目と本尊を説かれたもの等々がある。また五重の相對を能化の釈尊を用い、これをまた六種に説かれている場合もある。すなわち蔵通別の釈尊、文上本迹二門の釈尊、文底下種の釈尊と分けて説かれていることに、気をつけねばならぬ。この御書は、いかなることを大聖人が説かれているかということ、たえず、以上にのべた分類に詮意して拝読しなければ、無意味のものとなる」(戸田城聖全集一卷, 御書の拝読について, p. 134-125)

戸田先生の議論を整理すると次のようになる。

### 相対

- ① 内外・大小・権実・本迹・種脱相対を完全に示すもの
- ② 権実・本迹のみのもの
- ③ 大小・権実・種脱のもの
- ④ 久遠元初の自受用身即日蓮大聖人と説くもの
- ⑤ 第一・第二・第三の教相で説くもの
- ⑥ 種熟脱で説くもの
- ⑦ 下種仏法の根底たる三大秘法を説くもの の差異がある。

### 三大秘法

- ① 三種すべてを説くもの
- ② 題目のみ
- ③ 題目と本尊のみ など差異がある。

### 釈尊

五重の相対を能化の釈尊で説き、それを

- ① 蔵・通・別の釈尊
- ② 文上本迹二門の釈尊
- ③ 文底下種の釈尊

と、合計六種に分けて説く場合もある。 35/37

最後に先生は、各御書がどの分類・立場で説かれているかを常に踏まえて拝読しなければ無意味になる、と結論づけている。

これが御書解釈の難しさである。従って、個人で御書を読んだのであれば、必ず誤読してしまい、釈迦を中心とする世界観にとらわれてしまうであろう。そうならないためにも、古くは大聖人の御書を最も正しく解釈したと戸田先生が評した日寛上人、近代では牧口・戸田・池田先生（2010年以降は除く）に還るのは、御書を真剣に学びたいものにとっては必然の態度となろう。

これが戸田先生の御書根本の精神である。なんと素晴らしい精神ではないか。そして戸田先生の御書の緻密な分類には感嘆させられる思いである。日蓮大聖人御書講義シリーズでは、明らかにこの御書根本の精神が守られており、佐渡以前の御書も必ず佐渡以降の根本教義が付け加えられて解説されている。ところが2010年以降の勝利の経典御書シリーズやその他の著書では、この立て分けは考慮されていないようである。特に、文底下種の釈尊、久遠元初の自受用身即日蓮大聖人、第三の教相は徹底して避けられているようにみえる。この結果が、2010年以前と2010年以降の御書解釈が全く違うものになっている結果を生み出したとみなせよう。

特に、佐渡以前の椎地四郎殿御書を文字通り解釈し、創価学会の船を釈迦の船「仏の根本の願いを実現する法華経という船。その舵を担うのが教主釈尊」であり、綱手を引くのが多宝如来。中道一実の帆柱をしっかりと立て一念三千の帆を大きく張り、**四菩薩が漕ぎ手**となり万人成仏へ向かって前進する一なんと壮大な、偉大な船でしょうか。」（中略）「**歴史を創るはこの船たしか**」（勝利の経典御書に学ぶ 11, p. 119-120）「わが学会こそが、人類の「希望の大船」なりと確信して」（勝利の経典御書に学ぶ 11, 椎地四郎殿御書, p. 122）一としたり、同じく佐渡以前の四恩抄を用いて、仏宝をインドの釈迦とする（注釈では一応）「末法の文底下種の三宝とは、「仏宝」＝日蓮大聖人、「法宝」＝南無妙法蓮華経の御本尊、「僧宝」＝日興上人」（勝利の経典御書に学ぶ 10 卷, p. 46-47)

しかし本文では「本抄において「**仏宝**」とは、**釈尊を指しておられる**」（勝利の経典御書に学ぶ 10 卷, 四恩抄, p. 37）「「法」は諸仏が仏となった根源であるから、諸仏の師である。仏の恩を報じようと思うなら、法の恩を報ずべきである」（同書, p. 38）「ここにおいて「**僧宝**」とは「**法華経の行者**」、すなわち大聖人のお立場にあると拝されます」（同書, p. 38） 36/37

「大聖人の仰せ通りに広宣流布の実践を貫く和合僧の団体そのものが、僧宝の後継者です」（同書, p. 39-40）

などは悪質である。又、諫暁八幡抄に説かれる月と日の譬えを、いずれも法華経と解釈する「まず、指摘しておきたいのは、大聖人が「諫暁八幡抄」の御文で、釈尊在世と滅後末法に寄せて日月に譬えられているのは、いずれも「法華経」であるということです」（世界広布新時代への指針, p.11）などは、単なる御書の誤読であり、劣悪極まりないのである。そして、これらの**劣悪な教義書の集大成こそが教学要綱**であり、ここであらわになった御書根本の精神とは、身延の大崎ルールという、真筆または古写本（理想的には真筆のみ）を用い、これらが残らないものは全て偽書として排除するやりかたである。かつてこのようなものを池田先生は次のように批判されていた。

「邪宗身延派日蓮宗等が、自らの宗派の非をかくすため、三大秘法抄を偽書扱いにしたり、あるいは、御義口伝、本因妙抄、百六箇抄を偽書扱いにした」（『御義口伝講義』上 p. 800）

池田先生は明らかに身延を嫌っておられたようである。それを示すものとして、五老僧の一人、日向の口伝書である御講聞書が、日蓮大聖人御書講義全 39 冊シリーズには含まれていないことがあげられよう。先生は御講聞書を軽視されていたようであり、次のような言葉を遺されている。

「日興上人も、大聖人の御本意を正しく「御義口伝」に残された。同じく大聖人の御講義を聴いたはずなのに、日向の「聞書」のまとめ方は、天地雲泥に劣っている」（池田大作全集 82 巻, スピーチ, p. 30）

一方で教学要綱は、池田先生の敵であった身延派の教学の根本的ルールである大崎ルールが用いられているのである。異常なことであると思うのは、私だけではないであろう。そしてこのような書物群にはもはや師弟の精神などなく、2010 年以前の著書を否定した師弟断絶でしかない。ところが皮肉なことは、**身延派が偽書と言いつけていた三大秘法抄の古写本がつい最近発見され、信頼できる文献に加えられたことで、教学要綱の単法本尊論が学術的に窮地に追いやられる可能性がでてきたことである。**この件は後に議論する。そして、**2010 年以降の劣悪な講義が、全て池田大作先生の名の下に行われていることに、私は強い憤りを覚える**のである。